

「読み」障害における二重障害仮説の日本語話者児童への適用と文字表記別の検討：「読み」習得の背景となる認知能力について

著者	澁谷 文恵
発行年	2020
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2019
報告番号	12102甲第9523号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00160836

氏名	澁谷 文恵		
学位の種類	博士（行動科学）		
学位記番号	博甲第 9523 号		
学位授与年月	平成 2 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	「読み」障害における二重障害仮説の日本語話者児童への適用と文字表記別の検討 – 「読み」習得の背景となる認知能力について –		
主査	筑波大学准教授	博士（学術）	山中 克夫
副査	筑波大学准教授	博士（医学）	増田 知之
副査	筑波大学准教授	博士（デザイン学）	李 昇姫
副査	熊本保健科学大学准教授	博士（文学）	水本 豪

論文の内容の要旨

澁谷文恵氏の博士学位論文は、読み困難の背景となる障害構造を説明するための主要な仮説の一つである二重障害仮説の日本語話者児童への適用の可能性を検討し(研究 1)、幅広い年齢の児童を対象に「かな」と「漢字」という異なる表記ごとに二重障害仮説の適用の可能性と関連する認知能力について明らかにしようとした(研究 2)ものである。その要旨は以下の通りである。

第 1 章では、序章として、発達性読み書き障害の「読み」障害について、文字(列)から音韻(列)への変換(decoding)過程の障害である音韻認識障害仮説が唱えられてきたが、それだけでは不十分であること、そして新たな仮説として、音韻認識障害と自動化能力障害の 2 つの要素からなる二重障害仮説が提唱されたことについて述べられている。そのうえで二重障害仮説に基づく検討は、これまでアルファベット圏の言語に対し行われていることや、我が国では「かな」と「漢字」の質的に異なる表記を有することから、アルファベット圏と異なる結果がみられる可能性があることが述べられている。

こうした問題に対し、第 2 章では研究 1 として、「かな(単語、非語)」を用いて日本語話者児童における二重障害仮説の適用の可能性について検討している。この研究 1 では、先行研究(Wimmer et al., 2000; Sunseth & Bowers, 2002)とほぼ同じ年齢である小学 3 年生 94 名を対象に読み困難を示す児童を先行研究の複数の基準をもとに抽出し、それらの児童を「音韻認識単独障害群」「自動化処理能力単独障害群」「二重障害群」「その他」に分類することで二重障害仮説の適用の可否を検討している。その結果、分類カテゴリーごとの人数の割合は、日本語話者児童であってもアルファベット圏の研究と同様であることを明らかにしている。そのうえで、アルファベット圏における Sunseth & Bowers (2002)の基準に依拠した場合、日本語話者児童においても「二重障害群」が読み困難が有意に最も重いことを明らかにしている。ただし分類基準が異なると(論文では Wimmer et al., 2000)、有意差が認められなかったことから、著者は日本語話者児童では、二重障害仮説を部分的に支持するという控えめな結論に

とどめている。

第3章では研究2として、二重障害仮説について幅広い年齢の児童に対し、また「かな」と「漢字」という表記の違いという観点も加えて検討がなされている。具体的には小学1年生から6年生の日本語話者児童795名を解析対象とし、「かな」では音読の所要時間が平均よりプラス1.5SD以上、「漢字」では音読の正確性の成績がマイナス1.5SD以下を読み困難と定義し、そのような児童を選出している。そのうえで、「かな」と「漢字」のみに読み困難を示す児童の特徴を精査し、「漢字」では「二重障害群」において最も読み困難が重度であり、二重障害仮説に基づく予測通りであったが、「かな」においては、「二重障害群」ではなく「音韻認識単独障害群」において最も読み困難が重度であり、「かな」については二重障害仮説に基づく予測が当てはまらないことを論じている。また、「かな」と「漢字」のどちらの場合においても、二重障害仮説の枠組みでは分類できない読み困難児童が多く、特に「漢字」の読み困難に関しては、そうした児童が全体の半数以上(43名中23名)であったことを明らかにしている。そこで「かな」のみと「漢字」のみにそれぞれ読み困難を示し、二重障害仮説では分類できない児童について、他の認知機能上の特徴がみられないか、「視覚認知能力」と「語彙力」の検査を用いて検討している。しかし、そうした能力に低下がみられない児童が多く、明確な特徴の解明に至らなかったことが示されている。

最後の第4章では総合考察が述べられている。研究1では、「かな」を使って、アルファベット圏の先行研究と同様の学年で二重障害仮説の適用の可能性について検討し、その結果、基本的には先行研究と同様の傾向がみられたが、分類の仕方によっては違いもみられたことを明らかにしている。続く研究2では、小学1年生から6年生のすべての学年を対象を広げ、「かな」と「漢字」の表記別に検討したところ、二重障害仮説の枠組みで説明できない読み困難児童が多数存在していることが明らかにされている。こうした研究2の結果を踏まえ、著者は研究1や先行研究の結果を精査し、同じように二重障害仮説の枠組みで分類できない児童が相当数存在することを突き止めた。それらのことから、最後に著者は二重障害仮説というよりも、さらに多くの要因を想定した「多重障害仮説」を今後構築し検討した方が、読み困難のメカニズム解明につながるのではないかという見解を示している。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、発達性読み書き障害の「読み」障害について、読み困難の背景となる障害構造を説明するための主要な仮説の一つである二重障害仮説を日本語話者児童にも適用できるのか、我が国で初めて検討したものである。その点でオリジナリティーの高い研究と評価できる。そのうえで、先行研究と同じ年齢の児童(小学3年生)で、規則性のある「かな」を題材に二重障害仮説の適用の可能性を検討し、アルファベット圏と基本的に同様の傾向がみられることを明らかにした点も意義が大きい。さらに異なる年齢群からなるグループに、「かな」と「漢字」という異なる表記について二重障害仮説の適用の可能性を検討し、表記の有する規則性の影響を示唆するとともに、二重障害仮説では説明できない児童が数多く存在していることを明らかにし、今後新しいパラダイム(多重障害仮説)の構築の必要性に到達した点においても優れた論文と判断できる。

令和2年1月22日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士(行動科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。